

総合ソリューションカタログ



CONTENTS

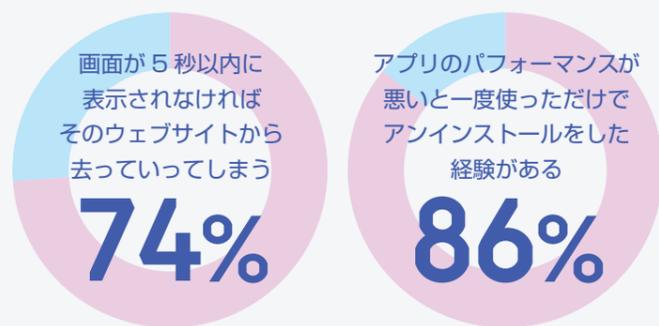
| | |
|----------|-----------------------|
| P4 ~ 7 | 製品特長 |
| P8 ~ 9 | AppDynamicsの活用シーン |
| P10 ~ 11 | EUM ユーザー体感監視 |
| P12 ~ 13 | APM アプリケーション監視 |
| P14 ~ 15 | Infrastructure インフラ監視 |
| P16 ~ 17 | Business iQ ビジネス監視 |
| P18 ~ 19 | その他の監視機能 |



あなたのお客様は貴社のサービスレベルに満足していますか？

デジタル・ビジネス時代のエンドユーザーの性向

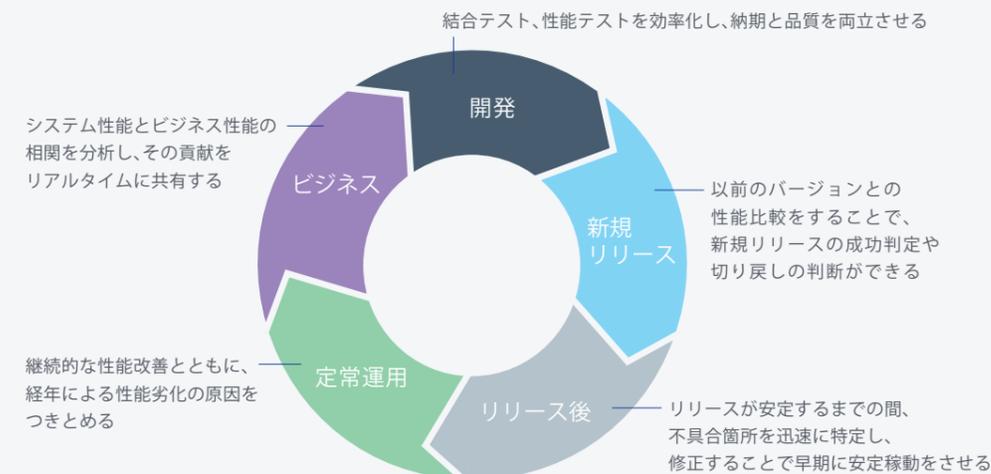
テクノロジーの高度化につれて、ユーザーの許容できるスピードも高速化してきています



原因はアプリケーションのパフォーマンスの低下

*ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ: App Attention Span (アプリへの関心持続についての調査)

AppDynamicsはアプリケーションのライフサイクル全般に渡って活用できます



新リリースの企画・立案、他アプリケーションへの全社展開をすることで、お客様のビジネスの継続的な改善と成長をサポートします

数秒のレスポンスの遅延や障害発生が企業の莫大な損失と信頼の失墜につながります

世界100ヶ国以上2,500社を超える企業がAppDynamicsを導入している理由

| | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 顧客からクレームが上がる前に予兆を検知して、素早く対処したい | 障害や性能低下からの復旧時間を大幅に短縮したい |
| 顧客や製品ごとのビジネス状況をリアルタイムで把握したい | 十分な性能と適切なシステム構成を両立させてコストを削減したい |

AppDynamicsを活用することで具体的で測定可能な費用対効果をお届けします

世界300社以上のお客様からヒアリングした実際の改善

| 対象部門 | 削減、効率化対象となる数値 | 平均的改善率* |
|--------|--|---------|
| 開発 | AppDynamicsによりリリース前テストの効率が上がる割合 (%) | 30% ↑ |
| | 開発者が性能テスト時に修正・調整に費やす時間の削減率 (%) | 50% ↓ |
| DevOps | 本番環境での問題における、MTTRやRCAに要する時間の削減率 (%) | 75% ↓ |
| | 開発者が本番での問題発生時に 障害回復に関与する時間の削減率 (%) | 50% ↓ |
| | コードチューニングすることでアプリケーションが高速化し、その結果サーバーのプロビジョニングを抑制できることによるコスト削減率 (%) | 25% ↓ |
| 運用 | 対応しなくても済むアラートの減少率 (%) | 35% ↓ |
| | アラートや閾値の調整管理にとられる時間の削減率 (%) | 60% ↓ |
| | 本番環境における性能問題の削減率 (%) | 30% ↓ |
| ビジネス | アプリケーションの性能低下を食い止められる時間の割合 (%) | 70% ↑ |

*世界300社以上のお客様からヒアリングした実際の改善数値をベンチマークとして保守的においた改善率

エンド-to-エンドのモニタリングを実現するAppDynamicsのアーキテクチャー

AppDynamicsは、全ての機能が単一の共通プラットフォーム上で実現されているため、エンドユーザー体感からアプリケーション、インフラストラクチャまで、トランザクションに関連付けて全ての監視情報を保持して、ボトルネック箇所を迅速に特定することができます。

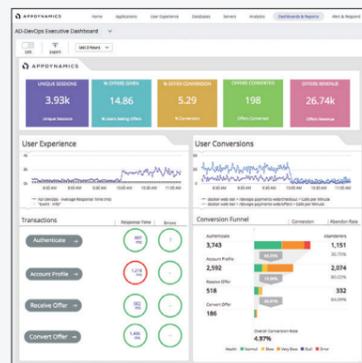
ユーザーインターフェース：開発、運用、ビジネス部門 (BizDevOps) の共通言語として、誰にでもわかりやすく可視化された画面から、全ての操作が可能です。

コントローラーサーバー：全ての監視データを集約して、活用したい切り口に応じて抽出するAppDynamicsの心臓部。SaaSまたはオンプレミスでの設置が可能です。

監視エージェント：エンドユーザー体感監視 (Web、モバイル、IoT)、アプリケーション性能監視、インフラストラクチャ監視 (サーバー、OS、DB、ネットワーク) から構成されています。

ユーザーインターフェース

役割別、目的別のわかりやすいダッシュボードで異常を表示したら、数クリックで問題箇所の詳細性能データまでドリルダウン。
初動時間を短縮し、迅速な問題特定に貢献します



リアルタイムダッシュボードの例

- 顧客インサイトを獲得
いつどこでどのようにユーザーがアプリケーションを利用しているかを把握
- ビジネスインパクトを可視化
アプリケーション性能の悪化によりどれくらいのビジネスインパクトがあったかを数値で可視化
- リアルタイムに監視
アプリケーションの性能をユーザーの期待通りの動作をしているかを確認

AppDynamics
コントローラーサーバー
(オンプレミス/SaaS両方に対応)

収集された性能指標やトランザクション・データをリアルタイム処理する、スケーラブルで高速なデータ基盤



マップiQ

アプリケーション構造の自動可視化

オンプレミス、クラウド、またはハイブリッド環境や、外部接続先とのAPIをも含むアプリケーションの全体関連図をダッシュボードに自動描画する可視化のためのエンジン。コードに手を加えることなく複雑なアプリケーション内やアプリケーション間の通信をリアルタイムに把握



ベースラインiQ

閾値を管理し予兆を検知

刻々と変わるレスポンス性能の動的にシステムパフォーマンスと閾値を調節するエンジン。また、異ヘルス・ルールを自動設定して監視を強化するので、ユーザーが影響を受ける前に事前に問題を調査することができ、予兆監視にも威力を発揮



ダイアグノスティックiQ

原因を発見して対処

プログラムコードに手を加えることなく、クラス、メソッドの呼び出し関係を可視化し、性能問題や障害発生時にはプログラム、データベース、インフラ指標を1パックにして保存することで原因を迅速に特定するためのエンジン



ビジネスiQ

ビジネス状況を把握

AppDynamicsのエージェントが収集する、エンドユーザー、アプリケーション、インフラそれぞれの指標やトランザクション・データを基に、全社各部門で利用可能な、リアルタイムのビジネス性能を分析するためのエンジン

AppDynamics
監視エージェント

ユーザー側の端末やモバイルアプリが原因?



エンドユーザー体感監視



Web、モバイル、IoT

アプリケーションコードが原因?



アプリケーション性能監視



Java、.NET、PHP、Go
Node.js、Python、C++

データベースのアクセスが原因?



インフラストラクチャ監視



サーバー、OS、DB
ネットワーク



AppDynamicsの活用シーン

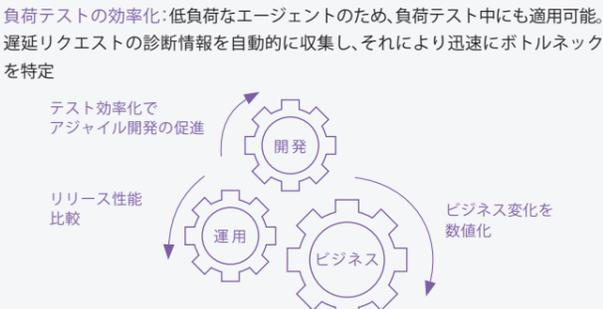
あらゆる企業におけるビジネス活動は、すでにソフトウェア無しでは遂行できなくなっています。さらに、ビジネスのデジタル変革が叫ばれる中、アプリケーションの開発はよりアジャイル化し、社内外との接続対向先は増え続け、インフラもまた柔軟性を確保するためにクラウド化は当然の選択肢となっています。これらのテーマに取り組むにあたり、従来は個別に最適な手法やツールが各部門に選択され、実現されてきました。その結果システム環境と運用管理はより一層複雑となり、本来の目的であるデジタル変革に向けて、各部門がシステムの共通理解をすることが困難となってきています。

AppDynamicsは、この複雑性を可視化し、ビジネス部門、開発部門、運用・基盤部門に横断的な共通言語として理解する手段を提供することで、目的とするデジタル変革をよりスピーディーに、継続的に実現するお手伝いをいたします。

DevOps

ビジネス変化を迅速に捉え、より高頻度で新リリースを投入するDevOpsの取り組み。スピードと品質の両立が求められ、新リリースがビジネスに貢献していることを証明しなければなりません。AppDynamicsはCI/CDツールとの連携や、迅速なリリース判定、システムとビジネスの性能向上確認などを通じて、Dev-Opsの緊密なコラボレーションを支援します。

- 新規リリース・トランザクションの自動監視: 自動的に新規のトランザクション・フローを発見し、性能監視を開始。リリース頻度の速いDevOpsにおいて運用負担を大幅に削減
- 開発チームにボトルネック箇所の情報を提供: 本番環境でリアルタイムに収集されるアプリケーション・リクエストの証跡 データをもとに、開発へのフィードバックをより早く・正確・効率的に実施
- リリースの効果をビジネス・メトリックスで把握: アプリケーションからビジネス・メトリックスをリアルタイムに収集。新規リリースのビジネス貢献度を数値として把握し、確実にビジネスへ貢献するためのアジャイル開発を支援

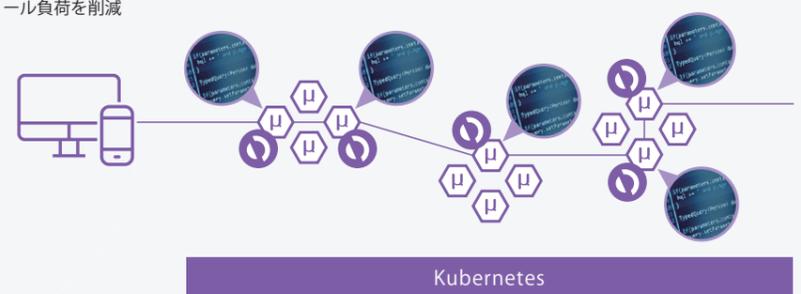


マイクロサービス

独立した開発、デプロイを可能にするアプリケーションのマイクロサービス化が進む一方で、それがシステム全体性能にどのように作用し、影響を及ぼしているかを掴むことは困難になってきています。AppDynamicsはマイクロサービスそのものの性能を測定する一方で、インフラ性能、ビジネス・サービス(コンテキスト)単位の性能、エンド-to-エンドのアプリケーション全体性能等を紐づけて監視することで、開発スピードを損なうことなく高品質なリリースを実現します。

- エンド-to-エンドの可視化: トランザクション・フローマップによりリクエストが処理されるサービスの流れを自動的に可視化し、問題箇所を簡単に特定
- コンテナ・レベルの監視: インフラ監視のエージェントは、コンテナの入れ替わりが発生しても継続的にコンテナのインフラ・リソースをトラッキング
- CI/CDに組み入れやすいエージェント: 変更の多いマイクロサービスにおける監視エージェントのインストール負担を削減

エンタープライズ向けのKubernetes監視: 1つのツールでKubernetesの監視に必要なデータの収集、Web画面上のレポートや分析、アクセス制御を提供。オープンソースのツールを組み立てるよりもシンプルかつスピーディーに監視を開始



マルチクラウド

パブリック・クラウドの台頭に加え、プライベート・クラウドやオンプレミスを選材適所で組み合わせたマルチ/ハイブリッド・クラウド構成が、ミッション・クリティカルなアプリケーションでも実現されてきています。構成の変更や移行に伴うアプリケーション性能の保証、複数環境をまたがるアプリケーションの一元的可視化、スケールアウト/バースト/サーバーレスコンピューティングへの対応など、メリットを享受するために乗り越えるべき複雑性を、AppDynamicsがサポートします。

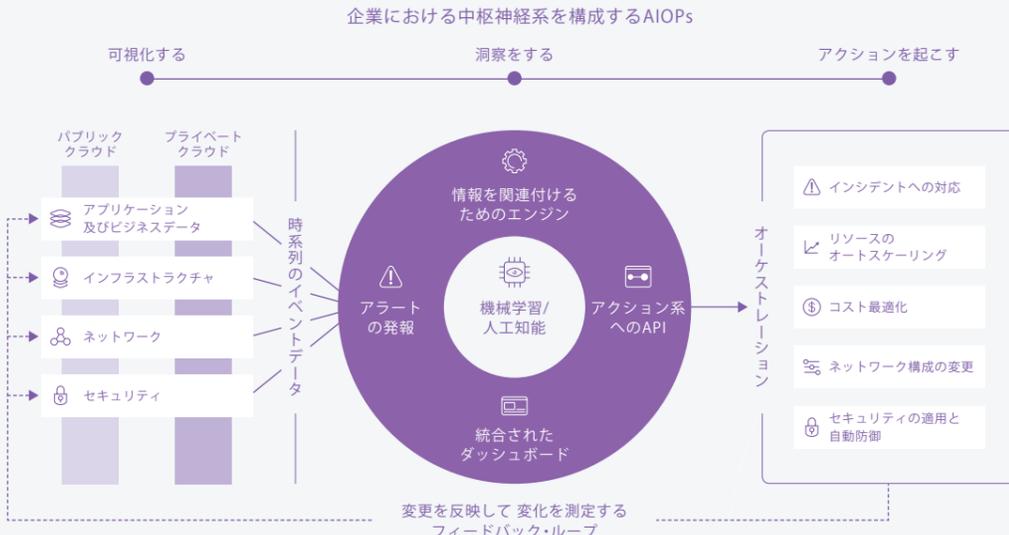
- 監視サーバをSaaSにするメリット: AppDynamicsのSaaSコントローラーは、クラウドにおける監視へのニーズに柔軟に対応。コントローラー自身の高速なプロビジョニング、監視対象数が増えた時のコントローラーのスケールアウトで運用監視におけるユーザー側の負担を削減し、ユーザーシステムのクラウド化を支援
- 各種クラウド・サービスのサポート: 各クラウド・プロバイダーが提供するIaaS上のシステムはもちろんのこと、AWS、AzureのPaaSの専用監視機能も提供。マルチクラウドにおける一元的な監視プラットフォームとしての役割を提供
- クラウド移行を支援: 移行前後のアプリケーションとビジネス性能を計測することで、移行のインパクトを正確に把握



機械学習そしてAIOPsへ

これまでの性能監視ツールの扱いきらさの1つに、適切な閾値の設定と維持管理に手間がかかるという点がありました。AppDynamicsは、当初より性能の自己学習機能を持ち、時間軸に応じて動的に閾値を変化させるベースライニングを搭載してきました。最新版からはここに機械学習を搭載し、さらに精緻な傾向学習と予測機能を持っています。将来的にはセルフ・ヒーリング、セルフ・レメディエーションを視野に入れ、アプリケーション、クラウドインフラ、ネットワークのみならず、脅威からの防御などの連携機能を司るAIOPs(人工知能による運用系)を実現していきます。

- 能動的に問題を検知: 平常時の性能やビジネス指標を学習することで、様々な角度からの異常検知を実現
- 自動RCA(Root Cause Analysis): アプリケーションのレスポンスに影響を及ぼしたインフラ性能の問題を自動的に特定
- 自動修正アクション: 自動RCAの解析結果を受けて修正アクションを自動化。ServiceNow、PagerDuty等 - インシデント管理との自動連携。Kubernetes、Turbonomic等 - ワークロードの自動変更。Slack、Webex Teams等 - チームコラボレーションとの連携。Cisco ACI等 - SDNによるネットワーク構成変更との連携





顧客満足度やユーザー生産性の向上のために

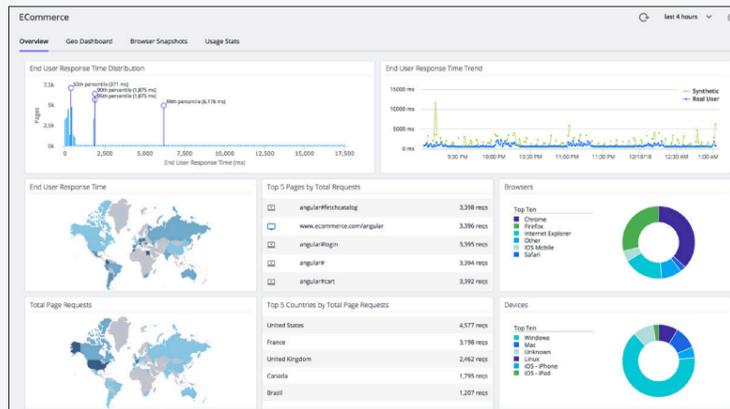
アプリケーションのユーザーは、Webブラウザやスマートフォンから企業システムを利用しています。ブラウザやデバイスの種類(PC、タブレット等)、スマートフォンのメーカー、OS、通信キャリア、居住地域など、アプリケーションを活用してより多くのユーザーを得ようとすればするほど複雑な要素が絡み合い、どんなユーザー体験をしているか、またその真の原因が何かまでを知ることはできません。エンドユーザー体感監視は、ユーザーが直面した全てのビジネスランザクションをトラッキングし、動作が完璧であるかどうかを把握し、問題がある場合は真の根本原因が端末側にあるのか、サーバー/アプリケーション側にあるのかをピンポイントで判別して問題を迅速に取り除くことを可能にします。



ブラウザユーザー監視

全てのWebユーザーのリクエストの詳細なロードタイム分析を提供し、

- ▶ エンドユーザーが体感しているパフォーマンスを可視化

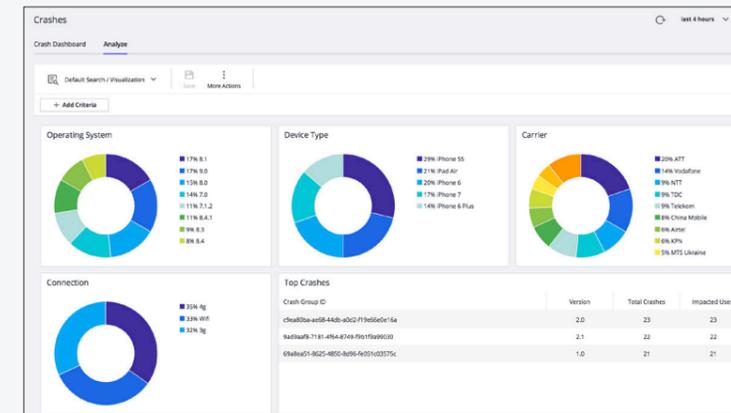


- Webページ、Ajax、iFrames等の動作状態と性能を可視化
- ブラウザからJavaScriptエラーを収集し、問題のあるJavaScriptコードと発生状況を確認可能
- Webページの性能問題を、ネットワーク接続、サーバー処理、外部コール、ブラウザ側処理等に分類して分析

モバイルユーザー監視

モバイル・アプリの利用状況やクラッシュ情報を自動的に収集し、

- ▶ ユーザーのモバイル・アプリ体験を理解して性能改善を促進

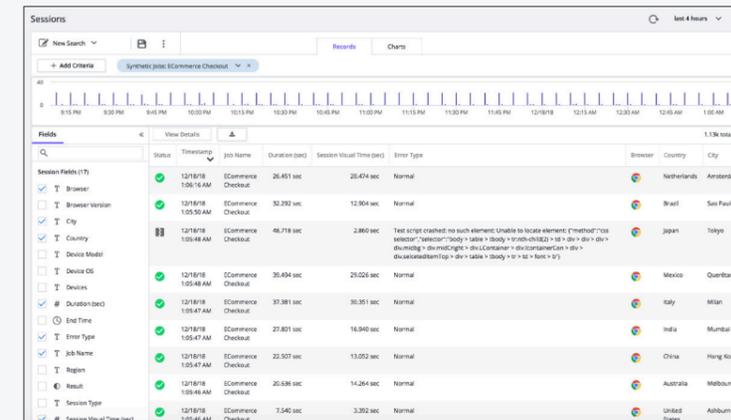


- モバイル・アプリが実行するネットワーク・リクエストを捉え、性能を把握。サーバー側のランザクションの監視と組み合わせることでエンド-to-エンドの可視化を実現
- ユーザーのスマートフォン上で発生したアプリケーションのクラッシュの詳細情報を収集し、端末側で発生した問題の原因の特定が可能

シンセティック・レスポンス監視

シンセティック・エージェントをリモートで一括管理して自在にWebアクションを実行し、

- ▶ プロアクティブにWebサイトの可用性とパフォーマンスをテスト



- Seleniumベースのテストスクリプトを使用してフォームの送信、ユーザー操作を含む完全なカスタマー・ジャーニーをシミュレートし、複数画面にまたがるワークフロー全体を測定
- メトリックスを収集し、すべての画面におけるユーザーエクスペリエンスをトラッキング
- Webサイトおよびサードパーティ・サービスが、稼働中の応答性能、機能性および可用性に関するSLAを充足していることを確認
- 競合他社のWebサイトのベンチマークや業界基準を使用してサイトの相対的なパフォーマンスを比較することで市場での優位性を維持



システム基盤の性能監視 クラウド、オンプレミス、ハイブリッド 環境の総合監視盤として

サーバーやOS、DBといったシステム基盤は、システム構成要素の中でも最も多くの種類のツールが存在しています。それを監視する側もそれぞれの専門技術者であり、システムやサービスの障害時には互いに複数のログを持ち寄って、真の原因特定までタイムスタンプを頼りに議論を繰り返して来ました。一方でエンドユーザーから見たアプリケーション性能への評価は、そのレスポンス時間に集約されます。AppDynamicsのシステム基盤監視は、これらの性能指標をアプリケーションの性能指標とリンクして保持することにより、エンドユーザーのブラウザやモバイルから、アプリケーション、そしてインフラまで、真の原因を単一のダッシュボードから究明可能な、エンド-to-エンド・モニタリングを実現しました。



サーバー、OS監視

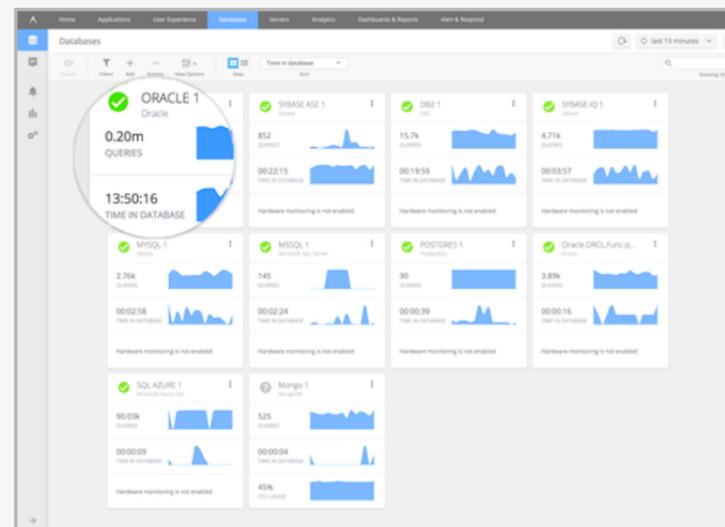
トランザクション実行中のインフラ性能を1つの画面で出し、
▶ アプリケーションとインフラの瞬時の切り分けを実現



- サーバー資源の指標やOSのプロセス情報を、アプリケーションを流れるトランザクションとリンクさせることで、ダッシュボードからのドリルダウンだけで真の問題点を発見可能
- Kubernetesなどの最新のコンテナ環境の監視をサポート

データベース監視

アプリケーションの性能分析からワンクリックで、
▶ シームレスにデータベースへのドリルダウン分析を実現



- データベース・サーバー自身には変更を加えずにデータベースの性能情報の分析と監視が可能。リモートに置かれたエージェントがデータベースの性能情報を収集
- 複数データベースを1つのエージェントでサポート (Oracle, SQL Server, Amazon RDS, Azure SQL, Sybase ASE, Sybase IQ, MySQL, PostgreSQL, DB2 LUW, MongoDB等)
- リソースの消費、実行計画、待機状態、ユーザーセッション等のデータベースにおける主要な指標を自動的に監視。AppDynamicsのベースライン機能により“いつも”と異なる動きを検知し、エンドユーザーに影響を与える前に予防的に調整と修正が可能

ネットワーク監視

ネットワーク・エージェントがアプリケーション・マップ上にネットワーク性能を表示し、
▶ 早期のネットワークとアプリケーションの切り分けを実現



- アプリケーション性能がネットワークに影響を受けたかを把握
- ネットワーク機器へエージェントをインストールすることなく、アプリケーション間のネットワーク状態を測定。そのためクラウドでも利用可能
- レイテンシ、輻輳、パケットロスなどの増加を可視化
- 分散されたマイクロサービス環境においてネットワークの問題を素早く切り分け



リアルタイムのビジネス性能監視 ビジネスに貢献するITのためのダッシュボード

アプリケーションのパフォーマンス、ユーザーエクスペリエンス、およびビジネス成果を明確かつ実用的な相関関係で表し、リアルタイムにビジネスの「状況」を可視化します。それにより、ビジネススピードを高め、強力な顧客ロイヤリティを構築することができるのです。

キャンペーンの効果の良し悪しが即時反映されるようなデジタル・ビジネスにおいて、結果をリアルタイムに測定するには系統的に様々なハードルがありました。異なるソースデータベース、遅延やバッチを含んだデータ転送、大規模なデータウェアハウスは高価であり、そこに蓄積されているデータはすでに鮮度が落ちている等々。

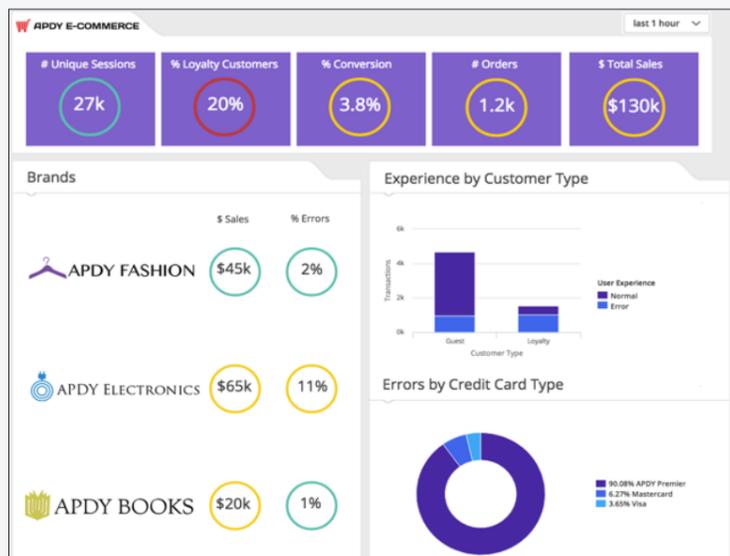
Business IQは、性能監視のエージェント以外に何も付加すること無しに、アプリケーションのパフォーマンス、ユーザーエクスペリエンス、およびビジネス成果を明確かつ実用的な相関関係で表し、リアルタイムにビジネスの「状況」を可視化します。それにより、ビジネススピードを高め、強力な顧客ロイヤリティを構築することができるのです。



ビジネス・パフォーマンス・ダッシュボード

リアルタイムにアプリケーション固有のビジネス指標を提供し、

▶ ビジネスKPIとアプリケーション性能の相関を数値で把握し、改善を確認



● 収集されたビジネス指標の値を自動的に監視し、ダッシュボードに警告を表示し、アラートを出すことが可能

● 1つのダッシュボードにビジネス指標とアプリケーション指標(エラー数など)を併せて表示することで関連性を把握

CIO/ビジネス部門

リアルタイムなビジネスの変化にアラートを受け取る

運用

アプリケーションの性能とビジネスの性能の関連性を把握する

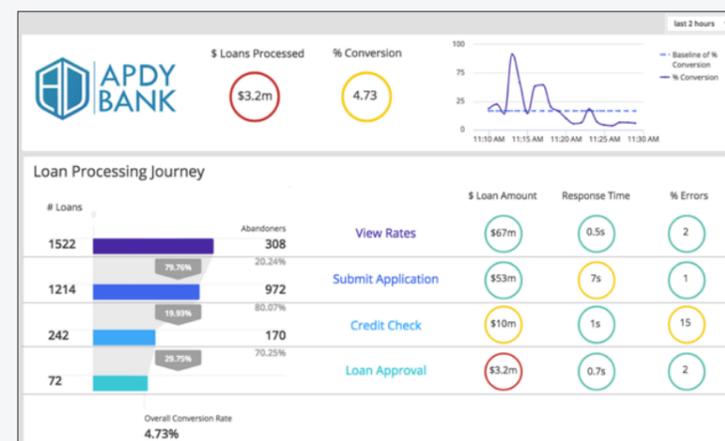
開発

アプリケーションの性能がユーザーへ及ぼす影響を計測-結果、より品質の良いコードを書ける

カスタマー・ジャーニー・ダッシュボード

一連のカスタマー・イベントの性能とビジネス・インパクトを1つのダッシュボードに表示し、

▶ ビジネスに影響を与えているステップを特定して、アプリケーションの動線を改善



● ファネルにて、コンバージョン・レートの落ち込みとアプリケーション性能を関連づけて表示

● リアルタイムにコンバージョン・レートの落ち込みをアラート

CIO/ビジネス部門

個別のカスタマー・ステップが全体の動線にどう影響しているかを把握

運用

コンバージョン分析でビジネスと開発に対して改善すべき性能を提供。各ステップでの離脱率を可視化

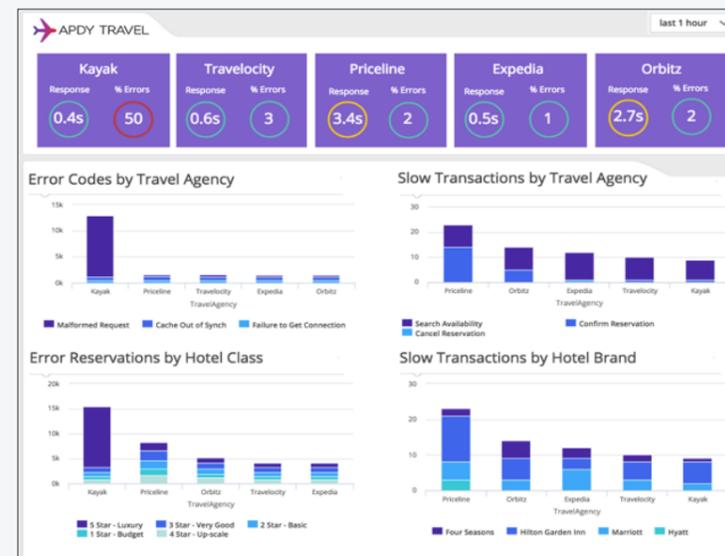
開発

自分が開発したサービスが全体のビジネスの結果に影響していることを理解

カスタマー・セグメント・ダッシュボード

顧客セグメント毎のユーザーエクスペリエンスを可視化し、

▶ 顧客セグメント特有の環境の異変を素早く検知



● リクエストの中からセグメント情報を識別し、セグメント毎の性能とビジネス指標を表示

● セグメント毎にビジネス指標とアプリケーション性能を自動的に監視。ダッシュボードに警告を表示し、アラートを出すことが可能

開発

セグメントに対するインサイトで問題が特定されることで修正を早くし、アプリケーション品質の向上を推進

サービス管理者

重要な顧客セグメントを管理

運用

重要な顧客セグメントへの性能問題を可視化し、問題を早期に解決



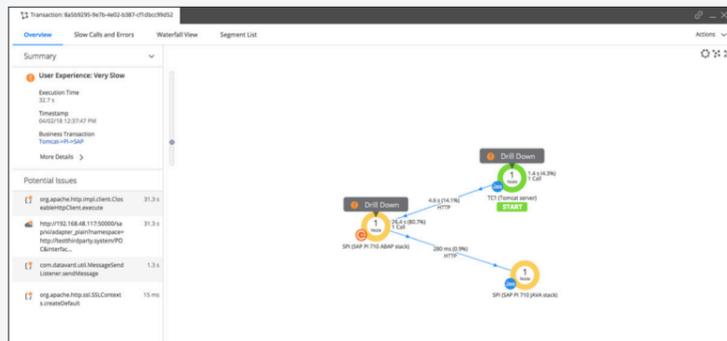
その他の監視機能

現在のシステムは多様なテクノロジーが結びついて1つのユーザートランザクションを実行しています。当初は性能に問題がない場合でも、周りの変化により新たなテクノロジーとの連携が必要となり、複雑さが増すにつれて性能を保証することが難しくなってきます。AppDynamicsは様々なテクノロジーに対応し、それらのサブシステム単位での性能を自動計測することで、従来は困難であった問題箇所の切り分けと原因分析を実現します。

SAP監視

SAPエージェントがシステム内のSAPサブシステムをマップ上で描画し、

▶ ABAPコードレベルで性能を可視化してSAPの問題をトラブルシュート

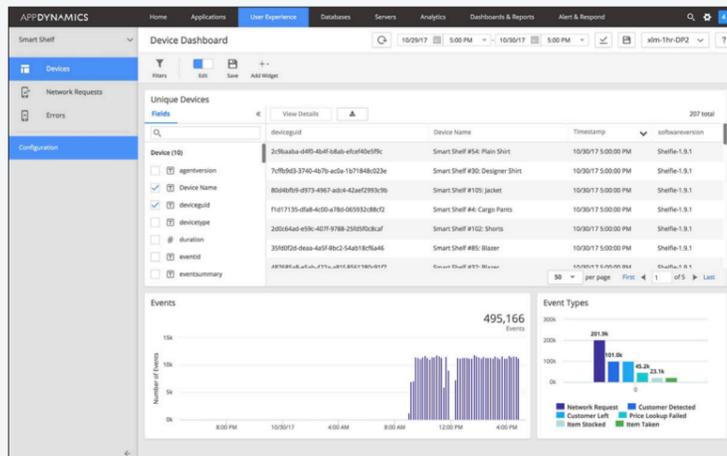


- SAPアプリケーションをフローマップに表示。SAPに連携しているシステムを一緒にマップで監視することで、各システムのSAPの利用状況を把握
- ABAPのコードやデータベース・クエリーを可視化し、SAPの性能問題を分析

IoT監視

IoTデバイス・データとともにIoTアプリケーション性能データ、さらに中のビジネス・データを収集することで、

▶ IoTの性能分析、利用状況分析、ビジネス分析を統合して提供

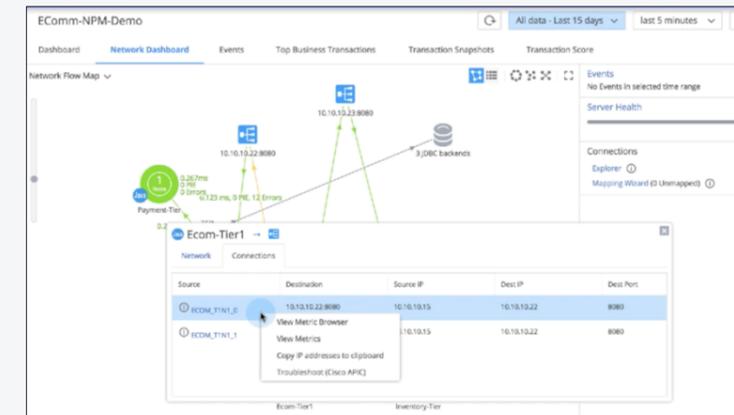


- C/C++あるいはJavaベースのIoTアプリケーションを監視
- デバイスから発行されたネットワーク・リクエストを捉え、性能を把握。サーバー側の監視と組み合わせればドリルダウンですぐにサーバー側の分析が可能
- IoTの性能をユーザー情報でセグメントし、ユーザードロップオフやビジネスへのインパクトを可視化
- デバイス側で発生したアプリケーション・エラーを収集し、全デバイスに渡るエラーの傾向分析および個別のデバイスでのエラー発生の原因分析が可能

Cisco ACI インテグレーション

AppDynamicsとCisco ACI間でアプリケーションとネットワークのマッピングを行い、

▶ ACIネットワークを修正し、AppDynamicsでアプリケーション・ヘルスの改善を確認



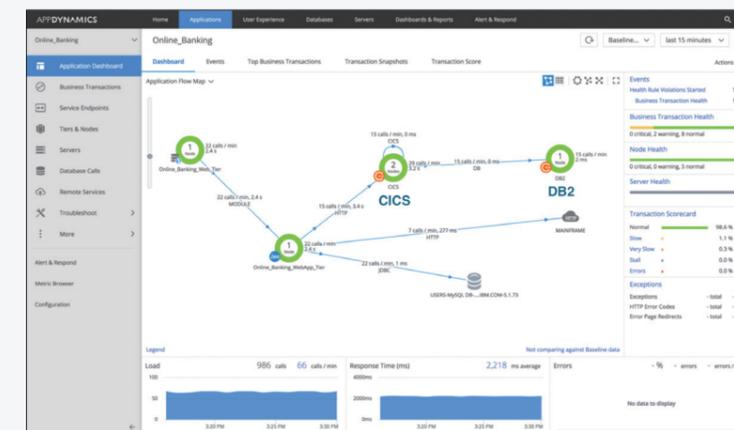
AppDynamicsとCisco® Application Centric Infrastructure (Cisco ACI™) ソリューションとの統合により、アプリケーションとそれを支えるネットワークの統一されたビューを提供

- アプリケーションレベルとネットワークレベルの両方の問題の迅速なトラブルシューティングが可能
- AppDynamicsのネットワーク・ビューで検出した問題の接続部位からACIコンソールを起動して分析

IBMメインフレーム監視

メインフレームを含むシステム全体を監視し、

▶ MQ、CICS、IMS DB、DB2をトランザクション・フローマップに可視化



- メインフレーム・サブシステムを通るアプリケーション・トポロジーを自動的に発見し、マップに描画
- 監視対象のトランザクションだけをモニタリング。他の代替アプローチに比べて低負荷を実現
- IBMとAppDynamicsのパートナーシップによるサポート
- オープン系のシステムとメインフレームのアプリケーションのつながりを1つのマップに表示し、メインフレームの性能が及ぼす影響を認識

AppDynamics会社情報

AppDynamicsはソフトウェアが駆動する今日のビジネスを支えるため「アプリケーション・インテリジェンス」という旗印をかかげ、2008年に米国サンフランシスコにてアプリケーション監視ツール (APM) として創業をいたしました。その監視対象をアプリケーション性能からフロントエンドのユーザー体感・バックエンドのハードウェア・OS・DB・ネットワークまで、エンド-to-エンドに拡張していくことで、世界2,500社以上のエンタープライズユーザーのビジネスを支えるまでに成長してきました。2017年からCiscoグループ内の独立事業体として、さらにスケールを拡大してお客様のビジネス課題解決に向けて活動しています。

AppDynamics LLC. (米国法人)

設立：2008年2月

代表者：David Wadhvani

所在地：303 Second Street, North Tower 8th Floor

San Francisco, CA 94107

電話：+1 (415) 442 8400

Email：info@appdynamics.com

URL：www.appdynamics.com

アップダイナミクスジャパン合同会社 (日本法人)

設立：2013年2月

代表者：カントリーマネージャー 内田雅彦

所在地：〒107-6227 東京都港区赤坂 9-7-1

ミッドタウン・タワー シスコシステムズ合同会社内

電話：03-6434-6500 (シスコシステムズ代表)

Email：sales.int.japan@appdynamics.com

URL：www.appdynamics.com

© 2019 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.

Cisco、Cisco Systems、および Cisco Systems ロゴは、Cisco Systems, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の一定の国における登録商標または商標です。本書類またはウェブサイトに掲載されているその他の商標はそれぞれの権利者の財産です。

「パートナー」または「partner」という用語の使用は Cisco と他社との間のパートナーシップ関係を意味するものではありません。(1502R)

この資料の記載内容は 2019 年 6 月現在のものです。

この資料に記載された仕様は予告なく変更する場合があります。



シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂 9-7-1 ミッドタウン・タワー

<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先